

# 一般教育の課題

——総合科目の開設に当って——

浅 香 正



## 一、大衆社会における新制大学

戦後、わが国における高等教育制度の改革により、従来の大学制度に代って新制大学が発足し、大学で開設すべき授業科目として、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目および専門教育科目とされたことは衆知のごとくである。大学制度のあり方はそれぞれの社会における教育密度と相関関係にあり、ある社会に実施されている大学制度がそのまま別の社会に導入されても、それが有効に機能を發揮するとは限らないのである。戦後わが国における教育制度の改革は主としてアメリカにおけるそれをモデルとして実施されたものであるけれども、アメリカは既に早くから大衆社会の段階に達し、教育制度も社会発展に対応して組織されたものであり、日本とアメリカとは社会的教育状況はかなり本質的に異なっていたのである。それにも拘らずアメリカの教育制度をモデルとして日本の教育

制度を改革し、実施してきたところに困難と混乱があったのである。しかるに、わが国における近年の社会的教育密度の上昇の結果、ようやくにして新制大学制度の理念が実現されるべき社会的状況が出現したとも考えられるのである。それぞれの学問や学部事情によって異なるであろうけれども、わたくしの関係している文化史学専攻を例にとってみると、毎年百数十名の学生が卒業して行くが、かれらのうち、学生時代に専攻した学問すなわち歴史学をもつて自己の将来の職業とするものはきわめて少数である。一〇名に満たない学生が大学院に入学し、他にごく少数の学生が中・高等学校の教師として教育活動に従事するのである。すなわち卒業生のわずか一〇パーセント足らずの学生のみが歴史学を専攻して、それを職業とし、他の殆んど多くの学生は別の職業に従事する。これは明らかに戦前と異なった教育的社会状況であり、大学教育における新しい大衆社会的状況の出現であると呼んでよいであろう。旧制の大学制度で教

育を受けたわたくしは、大学を卒業すると同時に、昨日まで黒板を前にして坐っていた生活から、今日からは黒板を後にして教壇に立つという生活に転換したわけであるが、そこでは大学教育と職業とが直結していたのである。しかし、今日の大学では、少なくとも歴史学に關していえば、専門教育と自己の将来の職業とは必ずしも直結しないのである。このような教育的社会状況の変化は歴史学においてのみならず、少なくとも人文系の学部、学科においても認められるであらう。

しかるに新制大学において、少なくとも一般教育はどのように理解され、実施されてきたであらうか。一般教育の理念の曖昧さもさることながら、大学教育に従事する教員の一般教育に対する理解の不十分さのため一般教育は必ずしも教育効果を十分に発揮することはできず、学生間においても最も不人気な分野の一つであったと率直に認めなければならないであらう。もちろん一般教育そのものが大学紛争の導火線となったとは言い難いけれども、紛争の経過の中で、多くの大学において一般教育そのもののあり方に多くの問題点が提起されたこともまた事実である。

同志社大学においても、昭和四十四年九月紛争中になされた「一般教育研究小委員会中間報告」において、非常に簡単な項目の列記にすぎないが、次の約七つのことが反省すべき点としてあげられている。

## 1 一般教育理念の反省、広い視野にたつ豊かな人間形成といつた空辞の批判

## 2 広く浅い「知識」の切り売り、物識りとしての「教養」への

### 批判

3 高校教育のくり返し、教科書概論への批判  
4 無目的な科目羅列の反省

5 専門教育のための入門に対する批判

6 基礎教育科目への安易な転用への反省

7 専門教育との分断の反省、専門教育のあり方の反省と、大学教育の一環としての専門教育と一般教育の相互的にかかわりあいの反省

以上述べたことは教育内容に対する反省と批判であるが、一般教育の実施に当って最も強い批判の一つは大教室におけるマス教育である。このような反省や批判は新制大学発足以来、すでに存在しており、多くの大学がその問題の対処と解決に苦慮していることも衆知の事実である。それどころか一般教育そのものの必要性をとる潜在的意識すら一部に存在するのである。

従って一般教育そのものに対する反省と批判は決して新しいものではなく、大学教育制度の改革の際必ず提起される問題であり、古くて、しかも常に新しい問題であるといった方が適切であらう。

では一般教育に対するかかる批判や疑問がなぜおこってきたかを改めて反省することは一般教育のあり方を検討する上において決して無意味なことではないであらう。

## 二、一般教育の理念

近代科学の発達により、学問の研究分野はますます細分化し、学問が発達すればするほど、専門化の傾向を辿ることは学問の必然性

であり、また現代の諸科学は研究の緻密化と深化に支えられていることは否定することのできない事実である。だが研究分野の細分化あるいは専門化は、研究者をしてますます専門の研究分野に埋没させ、自己の従事している専門分野が、全学問体系の中にいかなる位置を占め、それがいかなる目的をもつものであるかという全体的普遍的認識の志向を弱める危険性を含んでいる。これは単に学問の研究分野に関するにとどまる問題ではなく、現代の複雑な社会構造における人間存在についてもいいうることである。高度に発達した現代社会にあって人間が社会的存在としてその生活を維持するためにはますます専門的知識と技術が要求される。たとえばいかに人間性豊かな善意の大功であっても、すぐに雨の漏るような家を建築しては、自己の社会的存在を確保することはできないであろう。だが高度に発達した現代社会にあって、人間は、ちょうど精巧にして複雑な時計の一歯車のごとく、巨大なメカニズムの中に投げ込まれ、人間存在の目的や意味を反省することなく、日常生活の随性に埋没する危険性が潜んでいるのである。

かかる学問の専門化、あるいは複雑な社会構造における人間のアトム化による、全体的普遍的なものへの認識志向の欠如を是正し、むしろ近代科学がもたらした学問研究の弊害を除去し、それを克服するものとして、一般教育科目が新制大学の中に設置されたと考えるべきである。たとえば、民主教育協会の刊行する「一般教育における総合コース」(昭和三十二年お茶の水女子大学総合コース研究会編)には「一般教育とよばれるものが真に重きをもつて考えられるのは、知識や学問の分化や専門化にたいして、あくまでも人間

的・社会的な統一化・一般化を目ざすものといつてよい。専門をもって分析の方向にあり、一般をもって総合の方向にある。」と述べられ、また同じく民主教育協会刊行の「大学における一般教育」では、「一般教育の目標は、学生に対して、特定の専門的知識あるいは技術的訓練をあたえることではなく、むしろ思考の方法を習得せしめると同時に、学問の成果を理解し得る能力を育成し、将来専門的研究をなし、また社会人として活動する際に必要な一般的教養を付与するにある。」と述べている。

このようにみると、一般教育の目標は、学問の専門化によっておこる欠陥を除き、総合的普遍的な判断力を養うことにあるというであろう。もちろんこれに対して異論もあるであろう。なぜなら専門研究において果して総合的普遍的な判断力を養うことが不可能であろうかという疑問がおこってくる。確かにこの批判は正当をえている。一般教育の目的はむしろいろいろ異なった学問体系や研究方法を複合的に習得するところにあるといった方が適切であるかも知れない。従ってここで明確なことは、一般教育は専門教育とは別の独立した教科課程であるということである。それにもかかわらず一般教育が新制大学においてその存在理由が十分に理解されず、むしろ教育効果の期待しえない重い荷物であるかのごとく思われた。その原因の一つは旧制大学から新制大学への制度的改革の際の事情によるものであると考えられる。

それは、新制大学の発足当時において、一般教育の目的や理念が必ずしも十分に討議、理解されず、多くの当時の大学人の間に、新制大学の最初の二年間をもっていわゆる教養課程とし、かつての旧



制高等学校、大学予科あるいは専門学校の期間に相当すると考え、いわば専門課程に対する入門的段階あるいは予備的段階あるいは基本的段階であるという考え方が支配的であったと思われる。従って、かつての旧制高等学校や大学予科、あるいは専門学校の教員が教養課程を担当し、専門課程は旧制大学の教員の担当領域とされていたのである。もちろんすべての新制大学がこのような形で発足したと断定することは極論であるかも知れないが、これが一般的な形式であったことも事実であろう。だがここにすでに新制大学の運営において根本的問題を含んでいた。その一つは本来専門教育課程と一般教育課程とはそれぞれ異なった原理によって組織された教育課

程であったにもかかわらず、その実施・運営に当って時間的上下の関係に置き代えられたため、教養課程あるいは教養学部を構成している大学がいろいろな矛盾や問題をかかえていることは衆知のとおりである。

### 三、一般教育における総合科目

一般教育が新制大学における一つの新しい教育課程として大きな期待が寄せられていたにもかかわらず、その理念の理解の不十分さや旧制の教育組織から新制のそれへの転換に際して安易な編制替えを行なったため、多くの問題をひきおこす結果となったが、これは制度上の問題である。だが他方一般教育の履修方法や教育内容に関しても問題がないわけではなかった。一般教育の目標の一つとして、学問研究の総合的理解の理念をかげながら、従来の専門科目を、単に人文、社会、自然の三系列に配分し、各分野から若干の科目を履習することによって果して教育の目標が達成されるかどうかには大きな疑問がある。

一般教育の理念が学問研究の総合的理解にあるとすれば、地域研究、比較研究あるいは学際研究といった領域は一般教育の教育理念を実現するに、最もふさわしい分野であると考えねばならない。地域共同体は一つの生命ある有機的な文化共同体であり、そこに政治、経済、文化、宗教などのいろいろな要素が錯綜し、従来の単一な専門分野の研究のみでは大きな全体像を理解することは困難である。ここに地域研究の存在理由があると考えられる。比較研究もやはり一つの新しい研究分野と思われる。われわれは世界各国、各地域に

おける「近代化」の研究を通じてそれぞれの国家や地域の文化的特徴やその個性をより一層客観的に理解しうるのである。また学際研究（名称はいささか生硬の印象を与えるが、interdisciplinary approach の訳）の最もな好例の一つは巨大科学として人工衛星をあげることでもきよう。人工衛星は現代技術科学の集約的表現であり、月世界への到達は単に自然科学的な技術の問題ばかりでなく、宇宙飛行士に関する生理的医学的分野の研究なしでは不可能である。このように手近かな問題をひろってみても、従来の狭い専門研究の分野では解決することのできない問題が多く存する。従ってすでに新制大学発足とほぼ同時期に、大学基準協会も一般教育研究委員会中間報告の中で、一般教育のコース・プランの編制方式の一つとして総合科目の方法を指摘し「この方法は従来の古いありきたりの方法の欠陥を是正する意味で考案工夫されたもので、一応各学問の分野の枠を撤廃し、数科目に亘り総合的な問題を取扱う方法であって、有能な教授が互に協力し、周到な用意と計画の下に実施すれば、きわめて効果的な方法である。」と述べている。それにもかかわらず、総合科目の実施はなかなか実現されず、ようやく昭和三十一年にいたり、お茶の水女子大学において、はじめて総合科目が目の目を見るにいったのである。「ギリシア・ローマ文明」の主題のもとに、十名の教員が担当された。しかし単位の認定に関しては、文部省の一般教育に関する設置規程に従って、従来の人文・社会・自然の三分野に分配されたけれども、このお茶の水大学における総合コースの実施を契機として、各大学においても一般教育の改革の一つとして総合科目を実施しようとする機運が現われたのである。

同志社大学においても昭和三十三年頃、大学に併置されている人文科学研究所で行なわれているキリスト教社会問題の研究を中心として総合コースの提案がなされたが、実現の段階までにはいかなかった。だが昭和四十三年より自然科学の単一の系列内ではあったが、総合化の試みがなされ、まず「現代科学の世界像」の講義がなされた。その後「エネルギー」、「情報」、「災害と公害」などの講義が行なわれたが、昭和四十六年にはじめ「災害と公害」が人文あるいは自然分野の単位として認められるにいった。このように同志社大学においても総合科目開設への部分的な動向が認められるなかで、文部省も大学設置規程の一部改正を行ない、従来の人文・社会・自然の三系列の外に総合科目の枠を設け、一般教育三十六単位の中に総合科目としての単位が認定されるにいったのである。そこで同志社大学一般教育委員会においても昭和四十五年十一月十九日の大学評議会の決定にもとづき、昭和四十七年度を実施目標の時期として総合科目開設の準備をはじめることになったが、開設準備に着手するや、やはりいかなる総合科目をどのような形式で設置するかが問題の焦点の一つとなった。

総合科目開設の困難さはすでに他大学の経験に照らして十分理解はされていたけれども、カリキュラム委員会が討論の結果、次の三つの柱を中心にして科目編制を行うことになった。

- 一 立学の精神にかかわるもの
  - 二 地域社会にかかわるもの
  - 三 学問のもっている現代性、普遍性にかかわるもの
- 大学という、客観的普遍的真理を探究する場において、立学の精

神というものが果して学問の研究対象となりうるかという批判があるであろう。しかしながら戦後私立大学の乱立した社会にあって自己の大学の存在理由を反省し追求することなくしては個性ある大学教育を貫徹することは困難であり、また一部国立大学の補充物の地位に墮する危険を含んでいる。もちろん立学の精神にかかわる科目を立てることによって狭い閉鎖の世界に安住したり、独善的な排他主義に陥ることはわたくしの最も拒否するところである。むしろ自己の存在理由を常に反省し、また学生諸君に研究教育を通じてそれを訴えることは私立大学としての当然の責務でなければならぬ。

第二の地域社会の研究も大学の学問研究における一つの大きな課題である。もちろん地域社会の概念規定にもいろいろな見解があるであろう。しかし従来の学問の分類が文学、政治、経済、機械、化学というような学問内容を中心にして行なわれてきた。だが社会は一つの生きた有機体であり、その中に人間が生存するとき、もはや単に従来のような学問分類法では人間存在の本質を十分にかつ具体的に究明しうるかどうか疑わしくなってきた。ここに地域研究の必要性がおこってきたのであるが、その一つの研究対象としてまず同志社が存在している地域そのものの研究も決して無意味ではない筈である。いずこの大学においても画一的な歴史の概説などを講義しているときには、もはや歴史学は自己のものとはなりにくくなっている。

しかし一般教育において特に配慮されねばならない点は学問と現実とのかわりあいである。学問が現実の「生」とかわりをもったとき最も真実なものとなってくる。歴史学のような過去を対象と

する学問であつても、過去の制度や思想が、その過去における「生」とどのようなかわりをもっていたかを追求するとき、そこに一つの生きた現実を体験することができのではなからうか。学問は現実の「生」とのかわりをもつことによって創造的になりうる筈である。がしかしこのことは学問が現実の政治に従属することの意味するのではない。むしろ政治は学問研究によって立つべきものである。

今まで述べてきたことには、いささか公私混同している面がなしとはいえないが、昨年四月より多くの教職員の方々の御協力により総合科目の実施に踏みきることができた。もちろんこれは一般教育の改革の一部にすぎず、今後解決すべき問題は山積しているけれども、一般教育が教職員の方々の御協力により一層充実されて行くことを念願してやまないものである。なお参考までに昨年四月より実施した科目を列記すれば左記のとおりである。

- 一 日本の近代化とキリスト教
- 一 京都の自然と文化
- 一 社会経済体制と人間
- 一 都市問題
- 一 公害
- 一 コンピューターと現代社会

(この原稿は昭和四十七年十一月十二日滋賀県立女子短期大学において開催された近畿地区大学一般教育研究協議会において「一般教育の現状と課題―総合科目の実施とその諸問題―」という題のもとに行なった報告の草稿をもとにして執筆されたものである。)

(大学文学部教授・一般教育委員長・文化史学概論)

# 大学における一般教育

深 田 尚 彦



## 一、教育

教育とは人間を変えることである。その方法として実験、実地調査や観察と、講義、討論等があるが、逆にこれらの方法を用いたからといって、すなわち教育ができるものではない。

動物は先天的に身に備わっている本能で生活している為に、教育不要の長所利点はあるが、およそ多年にわたり不変の天地に適応できただけで、もし自然が急に変貌するとそれに対して適応して生きつづけることはできない。動物の行動は親子多年にわたり同型の行動を反復しているので今日のような人間による環境破壊（山林を伐り開き湖沼海灣を埋め立て、工場の排気、廃液が撒きちらされる）に直面すると彼らは絶滅への道を歩むほかはない。

しかし人間には動物の本能のような天恵がなく親が放置すれば子は死ぬ。無力に生まれ付く人間には大変な保護と世話が必要だ。多

くの行動は生後に学ばれるもので、訓練によっては随分多様かつ高度な行動が子供に与えられる。これが教育（しつけ）だ。人間には本能（固定した生活能力）がないかわりに教育が可能だし、又教育無しでは人間の子も人間にならない（野生児がその一例）。すなわち人間には教育が必要だ。

動物の生活は固定—反復型だのに人間の生活は変化—適応型だ。これこそ人間の生活で、古来人の親はその子に「一層水準の高い生活を生きるよう」求め続けてきた。これが人間の夢と理想であった。

教育の可能性は脳の大きさと誕生時の無力さ（為に多年にわたり親に依存、同居して親の行動を学ぶ。この際、親は自分の生活を省みて子供の生活を一步高める）に基づく。

人間の歴史を回顧すれば初めて人間（原始人）は食料の獲保に努力した。次の世代の人々は狩や採集を牧畜、農耕に変えた。やが

て地球上の寒冷化等が人間に衣料とさらに住居をも発明させた。さらに農具、農法の改良で余剰農産物が生じて都市が生まれ、実用本位の生活から学問や芸術（非実用）のある生活に移り始めた。実用世界は経験に基づいて技術を発展させたが、他方学問の世界は思考（頭脳内での試行、実験）によって技術革新を飛躍的にした。人間歴史をみると緩急の差はあったがいつの時代にも人間は進歩していた。これらの進歩は親や先輩の行う教育作用の故なのだ。

生活は生命の維持に始まるがより豊かさを望み、幸福の増進に懂がれて思考し、やがては思考や人間自身をも対象として思考する（哲学の誕生）に到る。

人間の真の人間らしさは非実用の世界にあこがれ得る事だ。これこそ動物にはない世界で、これが学校を生んだ根源だといえよう。

一人の人間の成長を見ると身体が発達、運動動作の習熟、言語の獲得、社会集団の形成、知識の把握（外の世界を言語に変えて内に貯え言語を操作して未来に則応する。やがて外界のみか人間自身をも考察の対象とする）、そしてすぐれた人は先輩から受けとった知識に自分の豊かな体験を加えて、時にはこれらを完全に再編成（地動説、万有引力の原理、相対性理論、進化論、精神分析学等はこれに当ると思う？）して子孫に伝える。さらに言いかえると人間の成長は動作から言語へ、個人から社会（集団）へ、保存から改造へ、実用から非実用へ進むといってもよからう。教育を通して人間は、過去を学ぶから未来へ対処に進む。ただし、教育（訓練）がなければ人間は親の生活をコピーするに留まるだけかもしれない。

このように一人の人間の成長（可能性）と歴史の歩み（外からの

必然性、人間の作った物質体系—文明、公害等—が人間の適応を要請する）をみると教育がいかにあるべきかは自明なようである。

## 二、大学

大学は教育の最上段階にある。人間は先輩の文明を享受するのみか、それに一步を加えて後代に譲る。これに参加する人を作るのが大学の使命だと思う。

普通教育では日常生活に必要な基本的知識を与えるべきで、そこには社会生活を営むに必要なすべての知識と技術が含まれるべきだ。現代を一步進めるには、現有知識を総合整理することが必要で、そこで見つけられた問題が問われ、これに答えようとする時、自ら研究が生まれる。もし保有作業が普通教育ならば高等教育は改革改善作業的だと相対的にはいえる。

現有知識を受身的に身につけるだけなら百科事典（ブリタニカやその他の哲学、教育、社会科学、心理学等各科学専門のかなり大きい分量のもの）がほとんどその役を果たす。しかしこれらをさらに広い視野から比較考量し批判するためには思考の訓練がいる。これが大学で与えられるべき教育だと思う。この積極的習得に必要なのは学問（この非実用なもの）に興味と関心を持つことだ。このためには高等学校の知見に基づいて大学で一つの専門科目を選択するのが有効だ。好きこそ物の上手なれだからである。学問に必要なのは知能もさることながらむしろ積極的意欲だ。大学が専攻学部を設けているのは当を得ている。

学問を深めるとき誰もが行うのは隣接領域の開拓だ。学問を進め

る人なら誰もが広い知識を求めることになる。これが一般教育の名で与えられているもので、学問的向上には不可欠である。

新制大学の教育内容は一般教育、外国語、保健体育、専門教育科目の四部で構成されており、卒業に必要な一二四単位の中の七六単位以上が専門教育科目、三六単位以上が一般教育科目で充たされるべく要求されている。これが一般教育に関する規定である。真の望ましい人間形成には前記の四部分が共に必要で一般教育の必要は特に言うをまたない。古くは一般教育がすなわち大学であった。

### 三、一般教育

専門教育、一般教育の内容についての明確な区別や定義は法文にはない。筆者の考えはすでにのべたが、大学では好きな一科目を専門としてえらばせ、ここでは集中の一群を深く学ばせ、他方では人間文化の全般（正しくは専門の一科目だけ除いたすべて）を学ばせるのだ。

しかし一般教育の実情を見ると低調で大学には専門科目さえあればよいという誤解があるかに見える。

知るとは本来個物を広い全体の中に置いて見ることだから、よく知るには広がりが必要だが、自然科学系では実験設備と情報入手の便宜上門戸が狭められがちで、専門とは狭い特殊と誤解されがちだ。学問である限り如何なる専門科目でも鎖国だの閉鎖はあり得ない。ただし技術(手)の訓練は狭く限局される。手が器用だからといってピアノとタイプライターと手芸を習うのは不利だ。個々技術の指の動きが特殊だからこの三つを共に習えば混乱が生じて指の習熟が遅れるからである。概して職人芸は狭くなりがちだ。文学に比し医

学、工学は随分技術的かつ職業的訓練だと思うがそれでも誰もがこれを非学問とはいえない。学問は広がりの上に成立している。

職業的と呼んで技術的訓練を施すのならそれはここに述べた大学とは少し違っている。ここでいう大学——創造的人間を作る——なら専門教育があつていいがそれは必ずしも職業教育ではない。日本では専門即職業と考える人が多いようにも思う。正しい専門教育なら必ず一般教育と合併して完全なのだといえよう。だが大切な一般教育の実状は次のとおりだ。

(一) 多くの大学の講義が五百、六百、時に千数百人の大講演会であるために注意の集中が難しく学生はこれに興味を持つことが困難だ。これではテレビの通信講座にも劣るといえよう。

(二) 多くの大学での実状は、学生が一、二年次にソソクサと一般教育科目を学んでいて、義務だから聞いているだけという感じ、これならやめたがよからう。

この實際は大学における専門教育に携わる教師たちの一般教育輕視に基づくと思われる——だからこそ一般教育の超大型授業が生まれる。大型クラスこそ一般教育の不振因の最たるものだ。学生が長い受験戦争を越えて大学に来て見ると大学さえ輕視している(？)らしい一般教育に直面、ウンザリした所で肝腎な専門科目を与えられてもはや失った意欲は戻らない。真に望ましい大学教育は大学教育全体の努力から生まれるのだらう。

(三) 一般教育は大人教の上に講義内容は通論、概論に限るといふ偏見を持つ人も多く、

(四) 何よりも悪いのは一般教育は専門教育への基礎や準備コースだという誤解だ。

学問が相互に対等に尊重されない世界には学問もなければ学問的精神もあるまい。わが専門学科教育さえよければというのは余りにも一人よがりだ。

一般教育はソソクサと聞かせて、待望の専門科目に対してはガリと一転、熱心な受講態度を期待するのは無理な注文だ。

教育者こそ自由人でありたいし、いつも改革を画策する人でありたい。だのに実状は、誰かの作った学則や規定を金科玉条と墨守して、真の教育や人間を忘れている。權威に従って、思考を回避する人もある。世界は動いている。否、人間が世界を急速に変えている現代の状況下で、どうして大学は自らを未来に向かって変えようとなしないのだろう。

#### 四、むすび

手の習熟は局限された行動の反復を好むが、知性は限りなく広がりがたがる。大学は技術訓練機関ではないのだからその教育は次のようであるべきだ。

(一) 入学生にまず専門科目を与え、高校になかった新しさや深さの感動を与える。

(二) 専門科目を幾つか修めるに従って一般教育科目を徐々に与え近きより遠きに及ぼす。文化系専門学生には人文や社会科学から自然科学への順で与え、自然科学学生の一一般教育科目は自然、社会科学から人文に移る。しかもこれらを二年次以後四年までにわたり与える。

(三) 本人が選択する専門学科目とは違ふから、一般教育に多くの学科を配列提供して、自由に選択させ学生が興味と高い学習動機を持

つようにする。

(四) 講義クラスの人数を小さくする。

一五〇人以下にせねば学生は教師に関心を持つことはなからう。講義は大人数も可！その通りだろう。しかし内容をマスターさせようとすれば必然的に小人数にすることが要だ。

(五) 一般教育の改革は一般教育担当者の問題ではない。全学の教育的話題の筈。学問的向上には専門教育と一般教育が等しく必要なのだ。赤と白を並べて初めて赤が見える。専門教育がゆたかにみるのは一般教育を受けてからだ。他を知ってこそ我がわかるともいえるよう。

鎖国は学問を滅ぼし、学問的精神を駄目にすると思うが、わが専門だにあらばという一般教育無視がわが国には広くはびこっているのではなからうか。それは多分、孤高を守って誇る専門を枯れさせるだろう。いかに力んでも一人の教師の視野は他の三人五人を合わせたものには及ぶべくもない。日本人十人の話より一人の外国人の話は刺激に富むのではないか。現状の一般教育低調は戦時中の国粹主義ににていると思う。戦時中アメリカで日本語研究が盛んであったことと考え合わせて興味深い。

専門的物知りでなく自分の欠陥に気付く人を作るのが大学の教育だから、一般教育低調は大学としては大いに恥すべきである。

日本人は功と実利をあせるの余り、静かに考え思うことからほど遠いのではないか。国を挙げて経済大国に酔っていても、大学だけは努めて人間の現在と未来を見つめ、常に自省すべきだと思う。

(女子大学教授・一般教育主任・心理学)

## 入ルハ難ク出ヅルハ易シ

古 米 淑 郎

### 一 大学は行かずに卒業できるか

入ルハ難ク、出ヅルハ易シ。——とは、わが国における大学教育の制度的特質をよく言い当てた至言である。

わが同志社大学も、その例外ではない。すくなくとも、いわゆるマスプロ学部の特長科目の教育においては、そうである。

たとえば、経済学部でわたくしが担当する「労働経済論」は、三年生以上の選択科目であるが、昨昭和四十六年度の受講登録者数六百七十三名に対し、出席者が二百名をこえたことはなく、年間の推定平均出席率はわずか二十パーセントにすぎなかった。ところが学年末試験の受験率は受講登録者の七十二パーセント（四百八十四名）にも達し、そのうち

の九十六パーセント（四百六十六名）が合格し、合格者の平均点は六十八点であった。

それは、講義に出席しなくても、試験さえうければ、大部分の学生が低空飛行ながら合格し、卒業してゆくことを、示すものにはかならない。

もっとも、昨年度末は学費値上げをめぐる紛争のために、学年末試験をレポートに切り換えたという特殊の事情があったので、その影響が大きかったことはいなめない。

事実、学部事務室から送り届けられ、わたくしの身長とほぼ同じ高さに積み上げられたレポートの多くは、わたくしの講義内容とはあまり関係がなく、当時たまたま発売された数種の書物の多少ニュアンスを違えたダイジェストばかりであった。むろん、ダイジェス

トにも優劣があるから、それはそれなりの採点をしたけれども、よほどのヘマをやらないかぎり、不合格点につけにくかった。そのため、さきにお目につけたような結果になったわけである。

だが、大教室の講義における出席率が一般的に低く、大部分の学生が年間を通じて講義のほんの一部しか聞いていないのは、昨年度に限ったことではない。

経済学部では、すでに早くより、受講者数の多い講義を複数のクラスに分割し、また一年生に基礎演習（必修）を、二年生より四年生まで連続する専門演習（選択）を、それぞれ小クラスで設け、さらには父兄会の活動という迂回路をも強化して、学生指導の徹底化をはかってきた。その努力は、どの大学の

どの学部にも劣らないと、ひそかに自負している。

それにもかかわらず、多くの専門科目では、いまだに大教室における多人数教育をまぬがれることができないため、所期の効果を十分にあげるまでに至っていない。

入ルハ難ク、出ヅルハ易シ。——いくらかの留保をつけるとしても、まことに残念ながら、大筋においてそれを認めざるをえない。

## 二 大教室講義での実験

今昭和四十七年度の「労働経済論」に配当された教室は寧靜館三十一番（収容力平常時八百六十四名、試験時四百八十名）であったが、さいわいに受講登録者数が三百七十九名（対前年比二百九十四名、四十四パーセント減）であったので、大教室講義がもつ問題の実態を把握し、その解決方法を模索する目的で、かねてより断片的に導入していたいくつかの試みを、今年度は組織化して強力に実践してみた。

今年度の授業の日程と内容は表1のとおりであるが、第一の試みは、教材の選択と講義の方法に工夫をくわえたことである。学生の

記憶に残っていると思われる比較的新しい情報を教材にとり入れ、それを実証的に分析して学生のヒトミにあらわれる反応をみながら、講義を進めることに努めた。

そのため、学生には講義資料（年間一人あたりB4判三十二枚）をあらかじめ配布し、また読書指定をおこなった。

すでに昭和三十二年より、経済学部は他にさがけて講義と直結した参考図書を学科目別に整理配列した開架式文庫を設けて学生の

表1 授業の日程と内容

| 学期 | 週  | 月 日         | 授 業 内 容        |
|----|----|-------------|----------------|
| 前期 | 1  | 昭和47年 4月14日 | 労働経済論とは何か      |
|    | 2  | 4月21日       | 労働経済学の生成と発展    |
|    | 3  | 4月28日       | わが国労働経済の特質     |
|    | 4  | 5月5日        | こどもの日(祝日)      |
|    | 5  | 5月12日       | 賃労働の特質         |
|    | 6  | 5月19日       | 第1回テスト         |
|    | 7  | 5月26日       | 学会出席のため休講      |
|    | 8  | 6月2日        | 労働市場の特質        |
|    | 9  | 6月9日        | 経済成長と労働市場      |
|    | 10 | 6月16日       | 労働力需給の実証分析     |
|    | 11 | 6月23日       | 賃金とは何か         |
|    | 12 | 6月30日       | 生活費賃金理論        |
|    | 13 | 7月7日        | 生産力賃金理論        |
|    | 14 | 7月10日       | 第2回(前期末)テスト    |
| 後期 | 15 | 9月22日       | 賃金分析の基礎概念      |
|    | 16 | 9月29日       | 賃金水準論          |
|    | 17 | 10月6日       | 賃金構造論          |
|    | 18 | 10月13日      | 賃金形態論(その1)     |
|    | 19 | 10月20日      | 学生の受講放棄(国際反戦日) |
|    | 20 | 10月27日      | 賃金形態論(その2)     |
|    | 21 | 11月3日       | 文化の日(祝日)       |
|    | 22 | 11月10日      | 賃金構成論          |
|    | 23 | 11月17日      | 賃金体系論          |
|    | 24 | 11月24日      | 第3回テスト         |
|    | 25 | 12月1日       | 労働時間論          |
|    | 26 | 12月8日       | 労使関係論          |
|    | 27 | 12月15日      | 労働組合論          |
|    | 28 | 12月22日      | 第4回テスト         |
|    | 29 | 昭和48年 1月12日 | 総括と結論          |
|    | 30 | 1月29日       | 第5回(学年末)テスト    |

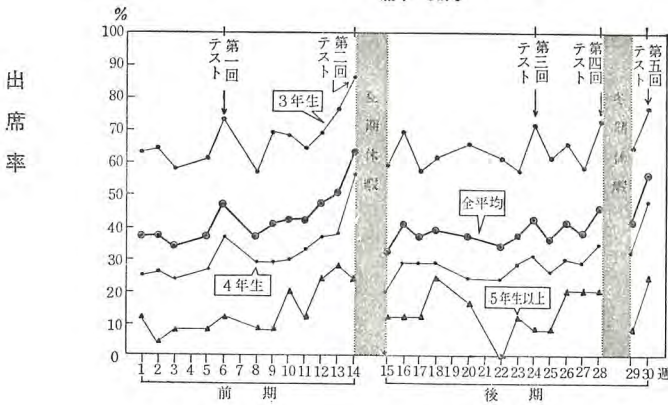
用に供しており、年を追うて充実してきたというものの、多数の者が同一図書と同時に読めるだけ十分のコピー数を用意するところまで行かないので、毎講時の読書指定方式をさけ、通年の指定方式をとらざるをえなかったが、かなり高い利用率が記録された。

## 三 出欠記録をとってみると

試みの第二は、学生の出欠状況を毎講時に出席票の回収によって記録したことである。

その結果は、年間平均出席率が四十一パーセントに達し、しかも年間を通じて大きな変動がなく、むしろ学年暦の進行につれて、い

図1 出席率の動向



くらか上昇傾向を示したことが、まず注目されねばならない。

このような現象は、これまで大教室の講義では経験しなかったことであり、出欠の記録をとったのが、大きく影響したと思われる。

そして、三年生の出席率が、最高時八十六パーセント、最低時五十七パーセント、年間平均六十六パーセントであるのに対し、四年生は最高時五十六パーセント、最低時二十パーセント、年間平均三十一パーセントにすぎず、五年生以上にいたっては、年間平均十四パーセント（最高時二十八パーセント、最低時ゼロ）の出席率しかなく、確かに年次階層別の構造が存在することが明らかとなった。

また、出欠記録を毎講時にとっていると、学生の中から自発的に、欠席理由を文書または口頭で届け出る者がでくるようになった。もとより、それは四十一件にすぎず、膨大な欠席数に対する比率としては、まことに僅少であるけれども、学生の中には素直な心情で勉強しようとしている者がいることを、示すものと受けとれた。

出欠記録にあらわれた、いま一つの興味ある事柄は、六月三十日の授業に、京大C戦線

の木下某と称する者の聴講があったことである。さいわいに目立つほどの授業妨害がなかったのも、この事実が、出席票を回収して、事後的に判明したのであるが、さっそく学部事務室を通じて京大に照会したところ、該当人物は存在しなかった。

単なる幻か、偽名か、それともイタズラか、それをここで吟味する余裕はないけれども、外部からの潜入に対して、われわれの講義はまったく何の備えももっていないことを、思い知らされた。

#### 四 なぜ一度も出席しないか

年間を通じて一度も出席しない学生が、全登録者数の二十二パーセントあり、年次別には、三年生の七パーセント、四年生の二十六パーセント、五年生以上の五十六パーセントが全欠であって、ここでもまた、年次階層別の構造が見いだされた。

そこで、講義に出席しない理由について回答を求めたところ、回答率は六十一パーセントで、理由別の内訳は表2のとおりであった。それぞれの理由の実態を、なまの声で示そう。

表2 一度も出席しなかった理由別構成

| 順位 | 全 欠 の 理 由             | 構成比 |
|----|-----------------------|-----|
| 1  | 余分に登録したので出席する気はなかった   | 29  |
| 1  | アルバイトに時間をとられた         | 29  |
| 3  | クラブ活動が忙しかった           | 12  |
| 3  | 出おくれて追いつけそうにないのであきらめた | 12  |
| 5  | 就職活動に没頭し余裕がなかった       | 8   |
| 6  | なんとなく怠けてしまった          | 4   |
| 6  | 試験さえ受ければよいと思っていた      | 4   |
| 8  | 病気のため                 | 2   |
|    | 計                     | 100 |

まず、余分に登録していた四年生M K君からの手紙――

ご多忙なおり、わざわざこのようなお手数をおかけして、大いに恐縮します。

あのようなハガキをいただかなければ、「余計に登録してあるのだから……」と済ませてしまっていたのですが、それでは先生に對して大変失礼なことをしてしまうような気

がして、ペンをとった次第です。

登録しておきながら、なぜ講義を受けなかったのか、との御質問ですが、ただただ申し訳ないばかりで、返す言葉ありません。

しいて言い訳がましいことをあげるならば、マスプロ教育が嫌だったこともありま  
す。「優」ばかりとうとするガリ勉的な態度が気に入らなかつたこともありま  
す。しかし、今となって言うのも何ですが、あのようなハガキを下さる先生の講義ならば、受けておくべきであつた、と後悔しております。

大教室で接する講義というのは、全く味気ないものです。しかし、今となって言うのも何ですが、あのようなハガキを下さる先生の講義ならば、受けておくべきであつた、と後悔しております。

つぎに、アルバイト組から三つ。

その一。三年生S Y君から――冬休みが終り、下宿に帰ってみると、一通のハガキが来ていた。それは労働経済論の欠席理由を問うものであつた。その時、私は大学に入学して初めて感動を覚えた。

昨春、弟が大学に進学したので、親からの送金が月額一万円に減つたため、アルバイトを余儀なくされた。……レジャー資金目的の

アルバイトと私たち生活費アルバイトは根本的に違う。……

その二。四年生Y Y君から――卒業単位を履修して、授業料納入のためアルバイトをしていました。ご心配かけて誠に申し訳ございません。

その三。五年生K G君から――留年をしましたので、働きながら自分で授業料を払わなければなりません。仕事をやりだすと、なかなか授業には出られず、今に至りました。どうぞお許しください。――

また、クラブ活動に専念した三年生M K君からは、――金曜日は四講時目のこの授業だけしかないので、クラブの指導者として自然とクラブに費やされてしまった。すみません。

あきらめ組の三年生N T君によると――最初の試験を受けそこね（出席しなかったもので知らなかった）、これはもうあかんと思ひ、あきらめた。――

さらに、就職が障害になつた四年生K O君は――

就職未決定で、そのことに悩み、講義に出る余裕がなかつたのです。――

それに反して、四年生AT君は――

就職が決まったので、田舎へ帰ったり、旅行をしたりして、試験を受けずに学年末を迎えることになってしまいました。……学年末試験さえ受ければよいと思っていました。……お葉書を頂く等おもいもしませんでした。……先生の温い気持と、講義への情熱と、学生への愛着の強さを考える時、全く頭が下がります。――

まことに理由はさまざまだが、こうして二十パーセントの学生が全欠したのである。

## 五 成績と欠席率との関連

試みの第三は、学生の理解度を確かめるとともに、学習意欲を刺激するため、年間に五回のテストを行ない、その結果を公表して、不審をただす機会を学生にあたえ、さらにそれを教材に還元して、指導の徹底をはかったことである。

テストは基本問題についての理解度と、論理の構成力のためすよう設問した。

その結果は、表3および図2のとおり、受験率は七十パーセントで、そのうちの三十一パーセントが合格したにすぎない。

表3 受験率と合格率

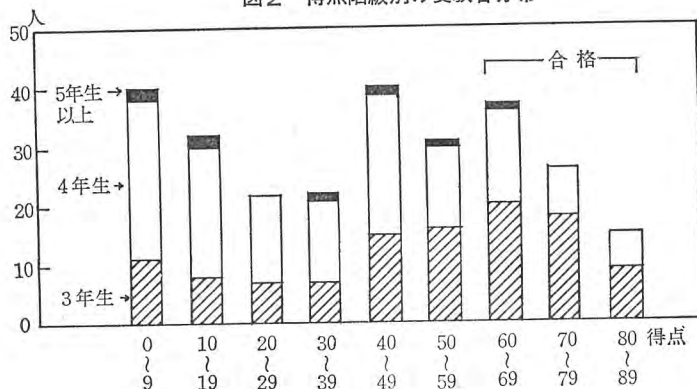
| 区 分     | 登録<br>(1) | 受験<br>(2) | 受験率<br>(2)/(1) | 合格<br>(3) | 合格率<br>(3)/(2) | 履修率<br>(3)/(1) | 合格平均<br>点 | 総平均<br>点 |
|---------|-----------|-----------|----------------|-----------|----------------|----------------|-----------|----------|
| 総 計     | 379名      | 265名      | 70%            | 79名       | 30%            | 21%            | 70点       | 40点      |
| 3 年 生   | 124       | 111       | 90             | 48        | 43             | 39             | 70        | 49       |
| 4 年 生   | 230       | 146       | 64             | 30        | 21             | 13             | 70        | 35       |
| 5 年 生以上 | 25        | 8         | 32             | 1         | 13             | 4              | 60        | 26       |

しかも、受験率も合格率も総平均点も、年次別の明白な格差を示し、ここでもまた年次階層別構造の存在があらわとなった。

このように、高学年になるほど下降格差が生じるのは、いわゆるマスプロ汚染度の進行を意味するのか、それとも、四年前の激しい大学紛争の後遺症とみるべきなのか、まだ私にはわからない。

ただ言えることは、成績と欠席率との間に逆相関がはっきりと認められたことである。図3は成績と欠席率との相関分布であり、最小自乗法による推定結果は図中の回帰線で示される。式であらわ

図2 得点階級別の受験者分布



すこ

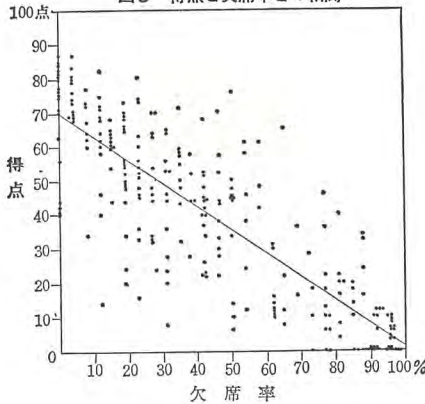
労働経済論の成績  
労働経済論=70.034-69.078 (欠席率)

(2.718)

$R^2=0.709$   $S=13.770$   $d=1.904$

この式の意味するところは、欠席率ゼロ(皆勤)の場合、労働経済論の成績は七十点であり、欠席一回ごとに二・六点が失われる、とゆうことである。

図3 得点と欠席率との相関



もちろん、出欠だけが成績を左右する要因

ではあるまい。能力ないし素質も、成績に影響力をもつことが、当然考えられる。そこで、その指標として全科目平均点を用いて分析を拡充してみると、つぎのようになる。

労働経済論の成績  
労働経済論=28.128-64.651 (欠席率)

(2.815)

+1.276 (全科目平均点)

(0.291)

$R^2=0.728$   $S=13.316$   $d=1.909$

この計算結果の意味は、一回の欠席数の増加が労働経済論の成績にあたる影響は二・五点であり、四回欠席すれば十点も下がる、ということである。

また、かりに全科目平均点の五点違う二人の学生がいて、欠席率が同じであるとすれば、労働経済論の成績に六・四点の差がある、ということである。

したがって、平均点の五点の差よりも、欠席四回の影響力の方が、大きいことになる。このように、出欠の重要性は、この分析でも確認されたのである。

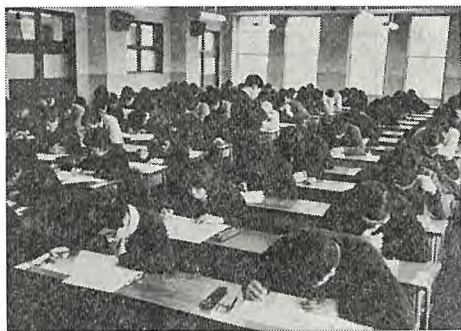
## 六 問題の学生と個別に面接

成績と出欠との結びつきが強いことは、自主的学習を重視すべき大学教育として、決して名譽ではない。また、こういう事実が存在するにもかかわらず、自主的学習を重視するかのうな装いのものに、あまり出席しなくても卒業できる現在のシステムを、そのまま放置することも許されまい。

もともと、欠席の多い者は、成績が悪くても当然である。だが、この試みでは、成績と出欠との結びつきが非常に強く現われたので、欠席率が三十パーセント以下であって、大教室で通常おこなわれる授業方法のもとでは、おそらくよい成績をおさめたと思われる者でも、労働経済論に関する限り、成績の悪いケースが少なからず発生した。

それらの者の全科目平均点を調べてみると、なかには極端に悪い者もないではないが、全体的には一般水準なみであって、格別に劣ってはいない。にもかかわらず、厳しい授業方法によって脱落したこれらの学生は、どのような実態にあるのか。

その手がかりを求めて、わたくしは、これ



入試を受ける学生たち

ら七十六名の学生たちと個別に面接し、学生生活や学習方法などについて、つぶさに実情をきき、過去のテストの答案を目前に示して、必要なアドバイスをあたえた。その結果、つぎのような事実を見いだした。

第一は、わたくしの面接申し入れに応じた者が九十八パーセントにも達し、わたくしの予想をはるかに越えたことである。

第二は、彼らの約七十パーセントが、ノートをとっていないことである。講義に出席す

ることで心の安らぎを覚えるが、講義の内容をとらえようとはしない。本当の意味では、講義をきいていないのである。

第三は、そのように学業に対する意欲を失っているかにみえながらも、私との面接を卒直によるこんだ者が、約半数に達したことである。この二面性の意味が私にはよく分からないが、学生たちの胸中に渇きに似た何物かが潜んでいるようで、おそろしい断面をのぞく思いであった。

第四は、問題の学生のうちの約十パーセントが、短期間ながら、海外旅行をしたり、北海道の農場に住み込んだり、クラブの合宿に参加したため、幾度かのテストを受けていないことである。

現状では、あまり授業に出なくても卒業できるのだから、学生たちが気ままな旅を楽しみ、あるいはクラブ活動の少なからざる部分が、授業に出ないことを前提として企画運営されているとしても、不思議ではない。しかし、私がとった授業方針のもので、そのように安易な心構えと行動は、たちまち馬脚をあらかずのである。

第五は、多様化した学生生活を垣間見たこ

とである。とくに、それは学業以外に生きがいを求めている者たちに顕著であった。いわゆる、ファッションモデル、ロックバンド・マネジャー、旅館の番頭、魚屋の自営、レストランの高級管理職、株屋の外交員、ジャズ喫茶のレコード編曲者、政治活動家など。いずれも、すでにアルバイトの域をこえて、彼らの生活基盤となっているように見うけた。

いうまでもなく、ここで問題にしているのは、欠席率が比較的に低いにもかかわらず成績が悪い学生たちのことであるが、これまでみたところから明らかなように、無気力であるか、気力があっても学業以外に向けられているか、いずれにしても、学業に集中していないことは確かである。

心ここにあらずという状態では、たとい欠席率が低くても、このたび試みた授業方法のもとで、脱落者が出るのは当然であろう。

## 七 学生の反応

今年度の授業で私が行なった試みに対する学生の反応は、最終回テストの答案の末尾に書き添えられた感想によって、かなりよく知ることができる。

まず、教材については、

三年生M O君——新しい資料を毎時間のよ  
うに頂いたことは、授業をうける者にとって  
非常に便利であったが、教科書の無いのが少  
し勉強しにくかったように思われます。

三年生A T君——やたらに教科書を買わせ  
る教授よりも、毎回資料を与えられた方が、  
どんなにか参考になったと思います。

三年生N K君——有益な資料をあれだけの  
部数刷るのは大変だったと思います。助手の  
方にもお礼を言わせて頂きます。

四年生Y U君——多くの資料は大変参考に  
なり、今は一応日本の労働経済の根本が、把  
握できた、という感じを持っています。——  
つぎに、講義の論述方法については、

三年生M Y君——先生の授業で私ははじめ  
て学問の論理というものを知りました。しか  
し、私淑した先生が私にからい点を与えるの  
は、運命のいたずらなのでしょう。

三年生T Y君——経済学は現状分析から出  
発するものだという一つの理念が、講義に一  
貫していて、個々の労働問題の検討を通し  
て、その理念の示す意味が何となく理解でき  
るに至ったこと。これが一年間講義を受けて

得た最大の収穫であったことを感謝します。

四年生Y H君——科学的データにもとづく  
冷静な分析と明快な論理の展開が一貫してい  
てよかったです。

三年生Y M君——論理の明快さの重要性を  
よく理解できたと思う。講義そのものが、ま  
さに明快な展開をされたので、その内容はよ  
くわかった。ただし、よく通りすぎた論理の  
スジは、かえって自分で考えることを怠らせ  
ることもある。これは自戒。——

また、毎講時の出欠を記録したことについ  
て、

三年生T M君——毎週、出席をとられるの  
は、何のためなのでしょう。

三年生H H君——大学生とは自主的に勉強  
しなければならぬものであり、出席カード  
は本来 unnecessary ものであるはずですが、かな  
りの強制力を持ち、授業へほとんど出席でき  
たのは、このためであると思います。

四年生M Y君——出席をとられるから、出  
席しようとするのは、恥しいことにちがひ  
ないが、私としては、最初のうちはもちろん  
出席票のために出席していたといえるふしも  
あったが、そのうちに、出席票はともかくと

して、労働経済論があるから、今日は出席し  
ようと思えるようになった。……学生が講義  
に出席するか、しないかは、その教授の授業  
方針によるものであることが判明した。年間  
に二、三回のみ出席し、卒業できる科目があ  
るとすれば、それは学生の責任だとは一概に  
いえない。大いに教授の責任でもある。——



カッタ・三浦鉄造

さらに、テストについては、

三年生K A君——五回のテストは苦しくて、何度か先生をうらみましたが、今になって考えてみると、試験でもなければ私のような怠け者は勉強しないでしょうから、これからも同じような方式でやってください。

四年生K K君——一年間の授業が一度の試験で評価されることについて、いろいろな面で不満がありました。この科目においては、一回一回の試験において、自分の頭の中で授業内容が整理され、勉強によってそれをさらに発展させることができ、非常に良かったように思います。

四年生S T君——先生の授業は、僕にとって、勉強する気を起こさせてくれるのに役立ったと思います。テスト、テストで苦しかったけれど、想い返してみれば、本当によくやったナ——という充実感がわき上がってきました。本当に一生懸命勉強してきました。

三年生N A君——先生の授業は全部出席したし、試験も受けました。自分なりに勉強したのだから、これで落第しても、何も言うことはありません。——

私の試みは学生に受け入れられたが、最初



大会会館で憩う学生

はいやな奴と思いつつも、義務的に出席しているうちに、講義がおもしろくなり、一年間がすぎてみると、充実感をおぼえ、これから厳格な授業を続けてほしい、と学生たちは望むようになったのである。

そして、四年生T K君は、「現在のマスプロ大学の弊害も、これで少しずつ解消されていくものと思われる」とさえいうのである。わたくしは、これ位のなま易しい方法で、多人数教育の困難な問題が解決できるとは考えないが、このたびの試みは、ベストではないにしても、ベターな教育実践であったと信

じている。確かに手ごたえはあったのである。

## 八 改革理念よりも技術革新を

私の試みは、一科目、単年度のものにすぎないから、その結果から大教室講義について一般論を、ただちに引き出そうとは思わない。しかし、この限られた実験からさえも、大教室講義が大学教育を荒廃させつつある大きな原因の一つであり、現状のままで放置してはならないこと、学生の無気力は必ずしも気力の喪失を意味せず、むしろ学問的ならびに人間的接触を欲していること、高学年になるほど履修率も得点も低下する年次階層別構造が存在すると思われ、そこには成績と出欠との強い結びつきが推定されること、学生は厳格な授業方法を受け入れる素地をもっていることなどについて、大方の注意を喚起することは許されよう。

現在までの大教室講義は、ごく簡単な拡声装置がほとんど唯一のたよりであり、ほかに特別の配慮がなされることもなく、旧態のまま続行されてきた。また、大空間のもので多人数に対する教育効果について、音響効果

のほかに問題にされたことがなかったよう  
に思う。

赤ん坊の写真をいかほど拡大しても、おとなにはなりえないと同じく、声を拡大するだけでは、大空間の多人数に同質の効果を期待することはできない。小クラスの名講義も、そのまま大教室に移したのでは、単に稀釈化されるのではなくて、むしろ効果が変質してしまうのである。

物財の生産と人間の教育とは性質が異なるけれども、大量生産が新しい技術によって成立しえたと同じく、多人数教育もそれを支える技術なくしては成り立ちえない、というアナロジーを、認めるにやぶさかであってはなるまい。

こうした技術の開発は、個々の講義担当者による教材、教授方法、教育機器についての創意と試行錯誤を通して進むものであるけれども、そのみにゆだねておいてすむべき問題ではなく、各学部が実情に応じ、ひろくカリキュラムの編成と科目担当の仕組みの再検討をもふくめて、さらに積極的に取り組むべき重要な課題である。

と同時に、大学当局も、全学的立場から、

多人数教育の問題を真剣にとりあげなければ  
ならない。

なぜなら、ここに報告したささやかな試み  
でさえも、講義資料を配布し出欠記録を管理  
するためには授業補助者が必要であり、資料  
の作成、印刷と、たび重なるテストの準備、  
監督、答案整理などには学部事務室の職員の  
全面的協力がなくてはならない。講義担当者  
自身の労苦も、とうてい小クラス担当の比で  
はない。そのうえ、今年度こそ登録者数が少  
なかったからできたものの、もし登録者が四  
百八十名を越す場合は、配当された寧静館三  
十一番教室の収容力では不足し、中間テスト  
を定例講時に定例教室で行なうことは不可  
能であり、さりとて臨機に他の教室を用意す  
ることも困難である。実は昨年も意図しなが  
ら実行できなかった苦い経験を私はもってい  
る。

これらの諸条件を整えるには、いずれも特  
別の配慮なり措置なりが必要であり、現状で  
は通常の業務として成り立っていないのであ  
る。その意味で、いわゆるマスのプロの解決  
は、入学定員をもふくめて、全学的に人的な  
らびに物的資源の再配分を必要としよう。こ

のことを、大学当局は十分に認識し、すみや  
かに行動をおこすべきである。

戦後の社会で、大学ほど技術革新の遅れた  
ところはあるまい。それとても、大学自治を  
となえ、教育と研究の自由を主張してきた大  
学人であるからには、所詮はみずからの唯我  
独善と無為無策の帰結にほかならぬというこ  
とに、深く思いをいたすべきではなからう  
か。

〔付記〕 成績の相関分析には、森一  
夫助教授をわずらわし、同志社大学電子  
計算機センターのハイバック一〇三を使  
用した。また、授業補助者として、大学  
院経済学研究科学生光安博行君の協力を  
えた。ここに記して感謝をささげる。

\*

\*

# 大学の若者たち

——その意識と問題——



原 田 亨

る学生がもらした言葉であった。

また、一学生から「大学内は人ばかり多くて疎外感を感じ、なんのたよりも学校に感じない。せめて一カ所だけでも本場に親身になってわれわれの問題について相談してくれる所があったらよいとおもっていた。」と書いた手紙を受け取った。

人間どうしのふれ合いを感じさせない今日の大学、そこには人はたくさんいるけれども、自分とかかわりのある存在は、一人もいないと、これらの学生たちは訴えているのです。

はたして今日の大学はこれらの学生のいう通り荒廃した砂漠の世界と化してしまっているのか。

るのであるうか。これは一部の学生の妄想にすぎないといえるであろうか。否、全ての学生が、そしてわたしたち教職員も共にかかわっている大学の人間関係の現実を敏感に感じとり、表現しているのではないだろうか。

そしてわたし自身も、十八年間の学生部生活の中で、特に、カウンセリングセンダーにおける八年間、数多くの学生たちとのふれ合いの中で、これらの学生の発言を裏づける事実によく出会ってきたのです。

今、この限られた紙面でそれらの全てについて述べることはできませんが、その一部を紹介することによって、大学の若者たち||今日の大学生の意識と問題を理解する一助ともなれば幸いにもいます。

学生を理解することの困難さ 今日、「大學生」という言葉から、何か一つの定ったイメージがわたしたちの頭の中に浮かんでくるであろうか。

戦前の大学生は、帝国大学に代表されるように国家の必要に応じた少数エリートを教育するという目的により、将来、国家を担う指導者の卵として期待され、また、自負していた。

はじめに 「ぼくは今まで人間を“もの”としてしか見ることができなかった。だが、ここに至ってはじめて“ひと”として接することができた。」——数年前の夏休みに、四十名余りの学生たちと小松学舎で共に数日間を過ごしたとき、小グループの話し合いの中であ

ところが戦後の新制大学は、教育基本法に明示されている通り、広く国民のための高等教育機関として位置づけられた。この教育改革により大学が教育を求める全ての国民大衆に開放された結果、大学進学率は急激に上昇しつつあり、それに応じて大学数、収容学生数も急増していった。特に学生数の増加は大半が私学によって収容され、七十五%を占めるに至っているのです。

文部省の調査によれば、昭和四十五年では同一年令層の約二十四%のものが大学、短大に進学しており、それが十年先の昭和五十五年には二倍の約五十%にまで上昇すると推定されているのです。

このような大学教育の量的な普及と進学率の上昇、学生数の急増は、戦後の国家主義的価値観の崩壊、絶対的権威の失墮などと相まって、学生の間には価値観の分裂、意識の多様化を促進させて、一層大学生に大きな質的変化をもたらしたのです。

他方、大学の側は戦前の旧制大学的な教育感覚、研究者意識を根強く残し、戦後社会の急激な変動や教育改革などに伴う大学生の質的变化に対応しきれないで、学生との間に深

い断層を残したままです。ここに今日の大学生を理解することの難しさの原因の一つがあるのです。

また、学生数の急増という量的問題とマスプロ化現象に教学条件の整備がついていけないというだけではなく、それによって引き起こされた教職員と学生、学生と学生、教職員と教職員との人間関係の喪失、対話の欠如によってそれは倍加されたのです。同時に、人間不在という教育にとって重要な問題をも提起しているのです。

学生にとって大学とは何か 今日、学生を理解するための一つの手掛りとして、学生たちが大学入学にあたっての大学または学生生活に対する意識、学生の問題、悩みの実態を知っていただき、大学としてこれらの学生の欲求や期待に応えるためには何をしたらよいのか、今後のわたしたちの問題として考えていきたい。

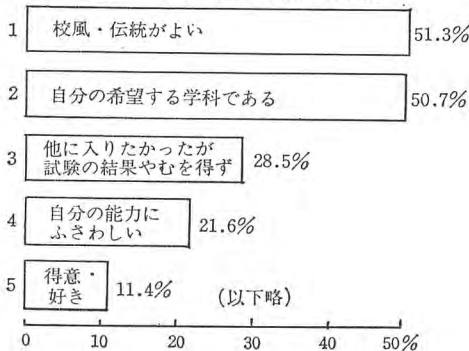
(註) 本学カウンセンシングセンターでは毎年新入生全員より「カウンセンシングカード」を提出させ、学生が相談にきた場合、より適切な相談援助ができるように用いています。ここに報告する内容は、

一九七一年度入学生のカードよりいくつかの項目(修学上、生活上および情緒的な問題、意識など)の集計結果をまとめたものです。

#### ① 本学志望の理由 (図1参照)

- 1 校風、伝統がよい 五一、三%
- 2 自分の希望する学科である 五〇、七%
- 3 他に入らなかったが、試験の結果やむを得ず 二八、五%

図1 本学(学部科)志望の理由



の順位になっており、入学者のうち約半数のものが積極的に本学の「校風、伝統」に理解をもち、「自分の希望する学部科」に入っています。学部科別にみると前者においては経済学部 六一・二％、政治学科 五八・四％、と電子工学科 二二・二％、また後者では神学部 九〇％、英文学科 七〇・七％、と化学工学科 三二・八％のように相当の差が生じています。

反面、「他に入りたかったが試験の結果、やむを得ず」入学したものが入学者中三人に一人弱の割合でいて、自分の希望する大学や学部科に進学できないで、ある挫折感をもって学生生活をはじめています。学部科別ではこの項目では逆に神学部〇％、英文学科一六・二％を最低に、機械工学科 四七・一％、電気工学科 四七・〇％と大きな開きがあります。全体の傾向として工学部が各学科とも「校風、伝統」の比率が低く、逆に「やむを得ず入学」の比率が高くなっています。これは後述のように工学部入学者に国立大学を第一志望校としているものの多いことと関連があるとおもいます。

## ② 本学入学に際して (図2参照)

図2 現在の学部科に入学して満足しているか

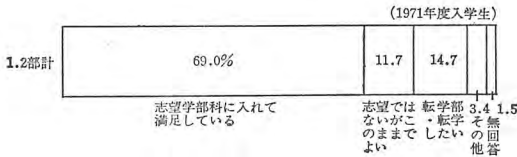
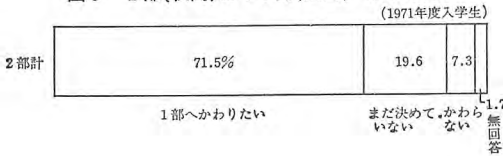


図3 2部(夜間)より1部(昼間)へかわりたい



- 1 志望した学部科に入れて満足している 六九・〇％
- 2 志望した学部科ではないがこのままでよい 一一・七％
- 3 できれば他の学部科へかわりたい 八・七％
- 4 できれば他大学へ転編入学したい 六・〇％

の比率で自分の満足度を表わしており、入学者中約七〇％のものが「志望した学部科に入れて満足」、反面約一五％のものが「現在の学部または本学からかわりたい」とおもっています。特に化学工学科 二六・九％、電気工学科 二六・五％、商学部 二〇・五％と夫々高く、多くのものが「自分の希望する学部科」として志望した神学部が〇％、英文学科が三・二％と夫々低いのは当然のことといえます。また「他大学にかわりたい」と希望するものが工学部各学科とも高い(八・四％～一五・七％)のが特徴的です。

## ③ 第一志望校はどこか

- 1 同志社大学 三六・一％
  - 2 国立大学 二六・一％
  - 3 私立大学 一五・五％
  - 4 公立大学 一〇・一％
- の順位になっており、同志社大学を第一志望校としたものは一位ではあるが、入学者中三人に一人強の割合でいるにすぎない。大半のものが他の大学を第一志望校としており、そして四分の一のものは国立大学をあげています。第一志望校に半数以上が同志社大学をあげているのは神学部 六六・七％、社会学科五

表1 学生生活の重点

(1971年度入学生)

| 順位 | 項 目                  | 回答率   |
|----|----------------------|-------|
| 1  | 大学生活を楽しむ             | 52.4% |
| 2  | 先生、友人との人間的接触をうる      | 45.9  |
| 3  | 専門的知識・技術を身につける       | 43.7  |
| 4  | 自分の趣味、特技、スポーツ等をのぼす   | 35.8  |
| 5  | 専門の学問研究がしたい          | 34.0  |
| 6  | 目指す仕事に必要な資格をうる       | 23.0  |
| 7  | 就職条件をよくし、将来の生活安定をはかる | 11.6  |
| 8  | その他                  | 1.8   |

六、七の二学部科だけです。逆に、工学部では機械工学科一二、九%、電子工学科一三、〇%などと低率です。全体の傾向として、文科学部科では本学および他の私学を志望したものが多く、工学部では各学科とも半数以上が国立大学を志望しています。ただし、文科学部でも商学部のみは同志社大学を第一志望校にあげているものが二三、〇%と少なく、逆に国立大学 三七、〇%、公立大学 一八、九%

と多いのは「やむを得ず入学」が四〇%であることからもうなずけることです。

#### ④ 二部より一部へかわりたい (図3参照)

1 希望している 七一、五%

2 希望していない 七、三%

3 まだ決めていない 一九、六%

の比率であり、二部入学者は入学時から一部へかわりたい希望をもっているもので大半を占めています。いいかえれば、多くの学生がもともと一部進学の意思をもっていたと理解することができます。当初から二部志望のものは未定のを除くと一割以下にすぎないのです。二部設置の理念と現実との矛盾を学生の意識の面からも指摘できるのです。

#### ⑤ 学生生活の重点 (表1参照)

有名大学へのエスカレーターにのせようと幼稚園時代からはじまる「親心」と、進学率の高さを競う「学校教育」によりいやおうなく受験体制にくみこまれた今日の若者たちは「大学入学」という目的を達成したとき、学生生活に何を求めようとするのか。

1 大学生活を楽しむ 五二、四%

2 先生、友人との人間的接触をうる 四五、九%

の順位をみれば、人間性無視、自由抑圧の受験戦争から解放された学生たちがまず学生生活に求めているものは何かはつきりわかります。

学生生活に「楽しみ」と「人間的接触」を求める今日の大学生、ここにも、戦前の大学生と比べて大きな質的な変化をみることでできるのです。

また、学部科別に特徴をあげれば、工学部では各学科とも「専門的知識、技術を身につける」が六〇、七〇%代で高く、その他「専門の学問研究がしたい」が神学部九〇%、文化学科六一、六%、「目指す仕事に必要な資格をうる」が法医学科三一、八%、商学部三四、七%など、その学部科の性格を反映している一面もあります。

学生の欲求と不安 本学のカウンセリングセンターには毎年、延五百、六百名前後の学生が種々の問題、悩みをもって相談に訪れています。これらの学生たちの高校時代から入学まで、そして学生生活における問題、悩みについてその実態を紹介したいとおもいます。

それは、これらの学生たちの問題、悩み

が、単に学生個人の高校あるいは大学への情緒的または非情緒的な適応問題として簡単に片づけられないものをもってしていることを感ずるからです。

これらの学生たちは自分の問題や悩みを語ることによって今日の高校教育、大学教育に對して問題提起をしているのです。

#### ④高校時代の問題、悩み

1進路 三〇、四％、2異性 二三、六％、

3学業 二一、一％の順位になっており、大学受験を前にして進路、学業が上位にあることは当然であろうが、異性の問題で約四分の一の高校生が悩んでいる事実は今日の高校生生活の一端を示すものとして注目しなければならぬとおもいます。男女別にみると両者共、進路は一位で、次いで男子では異性、学業となり、女子では対人関係、学業、性格となっており、女子に自己を中心とした問題が多いことが目だっています。

#### ⑤浪人時代の問題、悩み

やはり進路 一七、四％、学業 一四、二％で高校時代と同様上位にあるが、全体に比率は低くなっており、また異性 六、六％と非常に下り、在校時代と比べて受験勉強一本に生活

が集中し、交際の機会も減少したことが原因とおもいます。

#### ③入学時の問題、悩み

さすがに大学入学が決まると一応目的達成により現在切実に悩んでいる問題も減少したとおもいます。「特に悩んだことなし」四九、八％で一位となっています。二位は進路一二、四％で入学はしたけれどまだ進路について迷っている姿がみられます。

#### ④今まで悩みを人に相談したこと

有 四三、九％、無 五一、七％と半数以上のものが「誰にも相談したことはない」と答えています。自分の悩みを誰にも相談しないものが多いという事実は一体何を物語っているのだろうか。これらの若者たちをとりまく家庭、学校などにおける人間関係の現実を反映しているのではないだろうか。男子五四、五％に比べて女子が三五、八％と大分低いのは後述の相談相手の場合女子に全体の比率が高いのを見てもうなずけるところです。

#### ⑤悩みは誰に相談するか

1友人 五三、三％、2特になし 二六、二％、3母 一三、七％、4先生 九、四％、5父 九、三％となっており、自分の悩みの相談相

手を「友人」とするものは約半数で一位であり、「特に相談相手なし」とするものが二六、二％にものぼり、過去に「悩みを人に相談したことなし」五一、七％に比べて減少はしているけれども、現在、自分の周囲の人間関係に、悩みを打ち明け、相談できる人が新入生四人に一人は誰もいないのです。この事実からも入学後、「人間的接触をうる」ことに学生生活の重点をおきたい声の多いことを当然とおもわざるを得ません。また一方、「先生」、「父」を相談相手とするものがそれぞれ一〇％にも満たない事実は、家庭および学校における今日の若者たちとの断層の深いことをいまさらながら思い知らせるのです。

#### ⑥新人生の問題、悩み(表2、図4参照)

カウンセリングセンターでは一九五九年以来、新入生に對して毎年欲求不満調査(MPCL)を実施し、「同志社大学生は何を悩み、問題としているか」調査してきたが、過去十数年間一貫して上位に入っている悩みは「将来に對してばく然とした不安がある」「自分自身のほんとうの姿がつかめない」「真の友人を求めている」

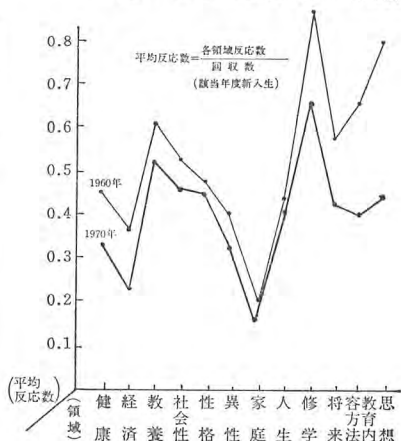
などであり、自分自身や人生、将来に対する

表2 MPCL項目反応数ベストテン

| (該当年度新入生)   |                                |             |  |
|-------------|--------------------------------|-------------|--|
| 1970年<br>順位 | 項 目 (領 域)                      | 1960年<br>順位 |  |
| 1           | 自分自身のほんとうの姿が<br>つかめない (人生)     | 3           |  |
| 2           | 将来に対してはく然とした<br>不安がある (将来)     | 5           |  |
| 3           | 試験が心配だ (修学)                    | 6           |  |
| 4           | 真の友人を求めている (社会性)               | 2           |  |
| 5           | 実行力に欠けている (性格)                 | 28          |  |
| 6           | 些細なことにこだわりすぎる (性格)             | 12          |  |
| 7           | 神経質である (性格)                    | 19          |  |
| 8           | 教養をもっと高めたい (教養)                | 9           |  |
| 9           | 人生の生き方や目標につい<br>て思い悩んでいる (人生)  | 23          |  |
| 10          | 自分かほんとうに望んでい<br>るものがわからない (将来) | 37          |  |

(注) 1960年1～5位、( )内は1970年順位  
 1. 大量生産的な講義のやり方に不満をもつ (12)  
 2. (前出) 3. (前出) 4. 政治に対して不信、  
 失望を感じる (15) 5. (前出)

図4 MPCL問題領域別平均反応数



不安が定着する傾向にあります。  
 こうして学生生活のスタートをきった学生たちからの訴えは、修学、教養、社会性、性格などに関するものが多く、具体的には「大学における勉学や将来の進路についての不安」、「自分の社会性、教養のないことに対する悩み」、「性格上の欠点」などです。  
 「自分自身のほんとうの姿をつかみたい」という言葉に典型的にあらわれているように、学生たちは大学という新しい環境に入って自己をみつめ、自我を確立していきたいという欲求と不安感もち、現実の学生生活の中でそれを実現していくことの困難さにゆきあたっています。永い間、受験体制の下で自主性、自我の確立とは無関係な「家庭環境」、「学校教育」とテスト成績の順位によって決定される没主体的な進路選択の結果、大学という自由な束縛の少ない開放的環境に放り込まれて、さてどちらを向いて歩いていったら

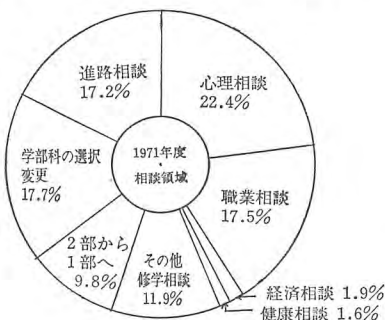
よいか、学生たちはとまどってしまいます。  
 大学入学によって、大学進学のためという今までの目標は喪失し、強制されてきた受験勉強という努力からも解放されます。また、それは息苦しい過保護的な家庭環境の束縛からの解放も意味します。

そして学生たちは、学生生活の中でこれまでの生活態度をかえりみて、将来、社会で一人の人間として充分に生きるため、大学時代に自分の性格や生活態度などを自分自身で納得していけるものにしていきたいという願望をもっています。親や先生にとって一見、理解困難な行動や生活もそのための試行錯誤であり、また、人間不在の「教育」への不信、叛逆であり、息苦しい過保護的家庭環境からの脱出、自立でもあります。

大学への問題提起 一九七一年度中にカウセンシングセンターへ来談した学生は学費改訂問題のため、例年より百名近くも減少したがその相談内容を問題領域別(図5参照)にみると、

1 心理相談 二二、四%、2 学部科の選択・変更 一七、七%、3 職業相談 一七、五%、4 進路相談 一七、二% などの比率になってお

図5 来談者の相談領域（1971年度）



り、広い意味での進路選択の問題が非常に多いのです。これまでの学校生活の中で主体的な方向づけがなし得ないで、問題をもつに至った学生が多くいるといえます。例えば、高校から大学へ進学するときに、自分自身の意識とは関係なく大学・学部科が選択されたこと、片寄った社会の固定観念と、大学の現実とのずれ、大学入学後の目標喪失感、勉強意欲の減退、学生生活の中で将来への展望が開けないいらいら、無力感など、そのよってきたところの背景は多様であるが、その根底

に横たわっている問題には共通したものがあるようにおもいます。

六九年の大学紛争を契機として露呈した諸矛盾、それをうけて大学改革の中でとりくまれつつある諸問題とこれらの学生のもつ問題、悩みは深く関連しています。

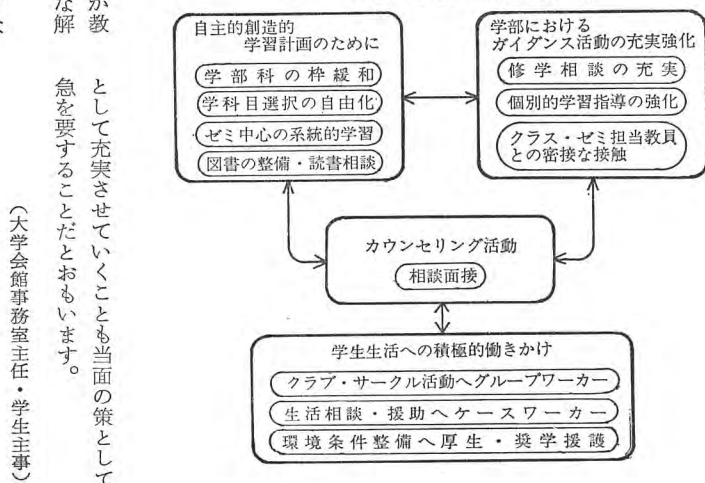
例えば、入試制度、進路指導、学部制、カリキュラム編成、転学部科、二部制度の問題などの現状からくる矛盾が個々の学生の上に重くのしかかっているのです。

したがってこれらの学生の問題、悩みは、単に個人のレベル

で解決されるべきものでなく、大学全体が教育の問題としてとりくまなければ根本的な解決の途は見いだされないとおもいます。

同時に、例えば、別記（図6参照）のような大学としての総合的な学生に対する相談援助活動を大学教育の中にはつきり位置づけて大学に対する学生の欲求と期待に応えうるもの

図6 総合的な学生相談援助活動



# 東北の一伝者

——三浦鉄造のこと——

## 三浦 重雄



カット・三浦鉄造

三浦鉄造は明治二十七年同志社神学校を卒  
えてキリスト教伝道に身を投じ、昭和七年に  
至る四十年の間、東北地方の伝道に終始した  
田舎伝道者であった。

慶応二年山形県酒田に生まれ、十七才の頃  
から郡役所に勤めるかたわら、当時山形市に  
あった山形英語学校で学んだ。ここでは米人  
宣教師J・P・モール氏や森本（後の松村）  
介石氏らの担当する英語やその他の科目のほ  
かに聖書講義という時間があった。向学心は  
相当もやしていた青年鉄造であったが、元來  
仏教の家庭に育ちその父親からの漢学の手は  
どきを通してコチコチの儒教じみた道徳を打  
ち込まれ、それが人生唯一の軌道と心得てい  
た。ところが異国臭を突くこの聖書という

一巻の書には、どことなく彼の魂の奥底を強  
く揺り動かすものがあつたようである。彼は  
さらに当時の一致教会講義所にも足を運ぶよ  
うになり、果ては意を決してモール博士から  
洗礼を受けるに至った。

明治二十年九月福島県若松市にある北会津  
郡役所に転任すると同時に若松組合教会に転  
会した。かねがね耳にして深い関心を持って  
いた京都の同志社入学の希望はこの頃いよ  
よ高まって、ついに郡役所を辞し、はるばる  
京都までわらじばきの旅で出て行き、同志社  
神学校で学ぶことになった。同時に入学した  
学生のなかでは恐らく最も晩学の方であつた  
と思われる。

父鉄造の同志社在学中のことは余りつまび

らかではないが、当時同級生の一人であられ  
た剣持省吾氏から鉄造の死亡直後に遺族宛て  
に寄せられた手紙の中で、同志社在学当時の  
鉄造のことを次のように述べておられる。

※

「……私ども同志社在学中は同級生として共  
に勉強しましたが、四十年前のことに属し記  
憶も極めておぼろげなものです、入学当時  
は二十四、五名の同級生ありしも、卒業した  
るはわずか七名。小生は級中最年少者、三浦  
氏は年長者のひとり、氏はすでに社会人とし  
ての風格を備えていました。小生の如きは最  
初から友というよりはむしろ氏に兄事したも  
ので、三浦君と呼ぶよりも三浦さんと呼んだ  
ものでした。その起臥動作すべてにおとなの  
趣きがあつて、おのずから尊敬の念を起させ  
たものでした。つねに羽織袴の折目正しく、  
多くは白たびをはき、そのキチンとした態度  
は今なお眼前に髣髴たるを覚えます。

氏はその風格の示す如く実に謹直熟誠の士  
でした。信仰上は言うに及ばず篤学勉励、英  
語など一生けんめいでした。実は氏と奥村君  
（後ハワイ伝道）と私の三人は上級の組に入  
って英語を勉強したものです。氏はわれわれ

年少者をよく指導して親切に忠言を与えられたものです。私など忠言を受けたこと幾度なるを知らず、今なお思い出してその深切を感謝しております。

入学当時の同級生が一人へり、二人へり、三年級の頃、ある事件のため大論争が起り衝突の結果分離して、優秀な級友数名の退学を見るに至った。あとに残った者はむしろ凡骨とみなされたものでした。その当時両者の間に立ち調停妥協に奔走された第一人者は実に三浦氏でした。これはけだし長者ならではない役目だったのです……」。

※

鉄造は「汝の父と母を敬え」の聖句に何う教訓にも似たものは幼時から培われていたもので、同志社入学後も郷里山形県酒田の両親のもとへは、筆まめに日常の生活ぶりや耳目に触れたことなど手紙にこまごまと書連ねて、それに多くの場合末尾に墨絵のスケッチを描き加えるのを常としていた。以下は濃尾大地震の当時同志社学生幾人か連れ立って現場へ急行した時の模様を書きし、親もとへ送った手紙の一部であり、これにも毛筆スケッチが描き添えてある。候文ではあるが当時の同

志社当局および学生たちの活動ぶりの一端が窺われようかと思う。

※

「拝啓先日ちよつと申上候地震の儀御承知の如くその中心地は名古屋大垣にて、新聞の報ずるところ実に驚くべき事のみにて候、當時同志社にても生徒は月々の限られたる学資の中より各自先を争うて義捐し、積つて百六十円、又同志社女学生よりは衣類等凡そ十捆り余りを寄附せられ候、地震の報を聞くや同志社よりは同志社病院院長ベレー博士及び堀国手並びに看病婦を大垣に送り且つ生徒一同を代表して校長小崎氏参り候、右義捐金百六十円は生徒中より委員を選挙し、即時その地に向つて救助のため携えて夫々分配施与致し一時の急を濟救仕候、私共四、五名僅かの閑暇を得て去る二日の午後二時僅かの路用金を懐にして草鞋にて出発致し、大津まで徒歩、同夜九時琵琶湖を太湖丸と申す蒸汽船にて十七里を距たる米原へ翌日午前二時着、直に投宿致候、米原辺は余程の地震なりしと見え宿舎の壁皆割れ果て居候、同日は夜明けごろ余程強き地震ありし模様、翌日早朝起出て又草鞋にて中仙道を通り美濃國へ出て関ヶ原まで参

り、二十日始めて通じたる大垣行きの汽車にて垂井より二里程も行きたる頃、人家皆倒れ実に目も当てられぬ有様、尚お進んで大垣のステーションに着したるに、板にて囲い、間に合せ居候、以てその混雑振りを察せらるべく候、市内を見渡すに何と申して宣しきや知らぬ有様、市内どこが道やら分らず、家は道に倒れ、屋根の上を人々通行致居候、大垣は地盤所々五寸位の巾に割れ居候、一軒として満足なる家はなく、又潰れたる家も一として未だ片付けられず其の儘に有之候、以て人心の混乱など御察し下さるべく候、南東の方面一円は焼失し所々にて人体の焼る臭い鼻息を止める程に有之候、胴より半分焼けた人など堀出し居るも見受けられ候、人々は皆三尺位の高さの藁席にて造りたる小屋の中にボンヤリ然と座り居候、いづれも病人五、六人ずつあり、実に見るに耐えぬ有様に有之候、小兒一人残して他は皆死したるもあり又老人一人残りしもあり、夫婦共に枕を並べて小屋に伏し居る者もあり、手足を折り頭を碎きて痛さに耐えず叫ぶ者などもあり、何とも表現致す事も叶い申さず候、官庁は米を与うるのみにて他に別段の助救も無之、折柄我が同志社に

ては貧書生らの奮発して出したる百六十余円を困窮者に分与し且つ又病院を設けて負傷者の治療に当たるに至りては人々皆拝み居候、同志社病院にて二日、三日の両日に治療せし者百三人、内三人死亡致候、私共病院を見舞いし時来合せたる患者は孰れも重傷者にて或は腕を打碎したる者、頭を碎かれし者、手や足を折りし者等にて実に気の毒なる有様にて有之候、私共大垣に帯在中も三回程強震あり、何れも二、三里の所にて大砲を発する如く響き渡りミリミリと揺れる様、真に身の毛もよだつ程に有之候、

斯くして私共一行は四日午後帰校仕候、大垣は京都を去る二十里にて有之候、尚お書加



ありし日の三浦鉄造

え度き事山々有之候へ共到底筆紙に盡し兼候（中略、ここには久邇宮朝彦殿下御葬儀当日の烏丸通の模様が詳報されている。）当地にても尚お日に三、四回は地震有之候へ共最早や慣れて意にも介せざる様相成候…（以下略）

※

鉄造は同志社卒業後ずっと後になって、兩羽教報という東北地方の伝道機関紙（昭和七年一月号）に寄せた「他の者によりては救を得ることなし」（使徒行伝・一一）と題した文の中で、引合いに、同志社学生時代の思い出の一つとして加藤伊蔵講師のことを次のように述べている。

※

「明治二十四年同志社神学校では仏教の講座を設けることとなり、その講師として東本願寺から加藤伊蔵氏が推薦されて週一時間ずつ、最初は仏教大意、仏教三国史等の講義がなされた。三年生の照井、西村、それに二年生の佐々木と私などこの講座に興味を持った者が、更にこの講義以外に加藤講師の下宿に押しかけて、毎週禅の初歩である唯識論の研究指導を迫ったものである。元來加藤講師は僧侶ではない。四日市の人で夙に人生の深

刻なる問題に悩み、業務を家人に託して自ら本願寺に入って仏法の研究に没頭すること多年、その奥義を究めて一かどの仏教学者となつた人であつた。この人ならと東本願寺から推薦された訳である。神学校での講義は吉谷覺寿氏明治諸宗綱要による十二宗四十八派の所依の教典、宗名義理、立教開宗、師資相承、諸門分別などの研修を進めて行つた。唯識論の研究の私たち一同は、興味が深まるに連れて、更に加藤講師の下宿に盛んに押しかけた。師は最初から私共の行動、言語、信仰に注意を払っていたが、逆に師から私共に向つてポツポツ基督教について質問を始めた。しかもその質問は決して神学や教義についてではなく、私共の入信の動機や信仰体験など極めて實際的なものであつて、私共はただ有りの儘の単純な応答をした。加藤講師自身の信仰についても突っ込んだ腹藏のない談話に聴き入るなど、思わぬ長時間を費すことも屡々であつた。

明治二十五年の夏のことであつた。私は休暇で帰郷し、佐々木君は叡山の避暑地へ日本語の教授に出かけた。照井、西村両君は滞京していた。加藤講師はこの二人を介してその

夏某日松山高吉教師（聖書翻訳、讚美歌編輯者の一人）を枕頭に招じて、彼ら立合いの上で、就床のまま受洗された。幾日後講師は彼らと家人に護られつつ永眠された。講師の遺志で私たち唯識論研究生の各々に遺品を頒たれた。私には講師自らの手に成った「雪窓問録」と題する原稿紙に認ためられた一冊が残された。

このことあって早や四十年、佐々木、照井両君は永眠し、西村君は父島の感化院に在って隠れた立派な仕事をして居られる。今は彼と私だけが残っている。想えば感無量である。

そもそも加藤講師の本願寺入りは単に仏教研究のためだけではなく、況んや仏学を弄ぶだけを事とする輩とも全くその撰を異にして、人生の問題に行悩み、その解決をこそ見出そうとの真剣な求道者であった。然し多年の本願寺入りにも、加藤講師の求むるものは得られなかった。然るにこの熱烈な求道者は端なくも当時の四人の学生たちの単純な基督教の信仰に、講師長年求めて止まなかったものを発見し、遂に入信されたことを今更ら深く考えさせられる。仏教は深遠であらう。玄明であらう。然し斯かる真剣な求道者をさえ

救い得なかった。而して単純なる神学生達の信仰によって大満足のもとに入信されたことを考えさせられる。加藤講師は受洗に際し、枕頭に侍していた照井、西村両君に受洗入信のことを発表するかと頼まれた。けだし彼は多年本願寺に思願を被った関係上、余り皮肉なことでもできなかったであろう。この加藤講師の入信のことを道旗泰誠氏がその著「阿弥陀仏より基督へ」の中に記述しているが、全く事実と違っているので、当時、書面でまた口頭で訂正方を申入れた。聞けば全然このことに触れていなかった兼子牧師からの又聞き談をそのまま載せたものであるとのことであつた。氏は再版には訂正することを約された。……」

### ※

三浦鉄造は明治二十七年六月同志社神学校卒業後は直ちに福島県喜多方町へ行き、そこで二年間伝道に従事し、次の一年間ハワイ・ホノルル府伝道局の要請によってホノルル府日本人教会で宣教に當った。明治三十年四月帰国後は同志社同窓の先輩で東北伝道の先駆者でもあられた片桐清治氏の後をついで、宮城県涌谷組合教会で十年間働いた。涌谷は仙

台領の薩摩ともいわれ、伊達家の忠臣安芸公の民城のある所であつた。鉄造は主日礼拝、祈禱会、聖書研究会等の定期伝道集会を通しての伝道をもつて能事終れりとするに忍びず、周辺各地の町村にも定期出張地を設け、小牛田、鹿島台、瀬峯の国鉄駅員の集団並びに学生団体に対する伝道にも力を打込んだ。多少の抵抗や圧迫は覚悟の上でまず手近な所から始めて一般社会にも進出して地方伝道教化に力を注がずにはおらなかった。

「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし成長させて下さったのは神である。」というのが彼の信念であつた。

鉄造が涌谷教会に赴任早々、市内を見渡すと、広くもないこの町に貸座敷が七軒、他の店舗と軒を並べていた。早速有志を募り矯風会を組織してまずその貸座敷撲滅を画った。しばしば公開演説会を開き、学校長、医師、僧侶までも激励して弁士として駆立て、街頭に進出して路傍演説も幾度も試みた。そのためばかりでもあるまいが数年後には一軒を除いて他は全て廃業もしくは転業をした。残る一軒の相沢某というこの営業者の養子長治氏は憤然と立つて、よしヤソ教が貸座敷を攻撃

するならますます拡張してやるぞと、他の廃業者の娼婦をも集めて逆転発展を画した。然るにしばらく後同氏は中風で身体を自由を失い懊悩すること数ヶ月、心機一転して、一求道者を介してキリスト教研究の指導を求めてきた。ヨシとばかり鉄造は出かけてこの貸座敷を訪ねて長治氏夫妻を相手に着々聖書の講義を始めた。しばらくして彼は業を家人に譲り別邸に移って静養、その一方熱心に道を聖書に求めるようになった。当時旧制第七高等学校の生徒だった義弟も、仙台師範学校の生徒だった妹(筆者小学時代の恩師)も帰省ごとに教会の礼拝に出席を欠かさなかった。明治三十九年鉄造が山形県酒田に伝道するに至った後も、長治氏は長逝されるまで、趣味の俳句をそえた信仰通信を鉄造のもとに送り続けられた。

明治三十八年福島、宮城、岩手の三県は猛烈なウンカの発生に伴って水田の全域に至る大凶作に見舞われた。今日のような防虫剤等の全く無かった当時のことで、米作は文字通り全滅。時恰かも日露戦争終結直後のことで世を挙げて戦勝に酔い、マスコミの事情も今日とは違って、他の地方ではこの大飢饉のこ

となど耳にもしない程だった。輸送力、官給の救援物資の準備も今日とは雲泥の差、地方役人はただ現地視察や調査をするだけで、食糧の欠乏は益々深刻化し、学校では、欠食児童および欠席児童の数はふえる一方であつた。この惨状をよそに教会では壇上から道を説くだけでは本来の使命は果たされぬとしてまず広く各地に訴えた。その声に応じて各地のキリスト教会の諸団体から急ぎ々寄贈されてきた金品糧食を近隣の津々浦々に運び届けるに当っては教会では一頭の馬を借り、その背に荷を満載して、牧師と二、三の信徒が馬子となって手綱を取り山間の村落までも運び届けた。しばらくして戦勝の結果払下げられた固いロシヤ製「黒パン」や日本軍払下げの乾パンなども加えられた。涌谷教会では街の筋向いにある小学校の協力で毎日昼食時には欠食児童のため礼拝堂と日曜学校分教室を昼食の場に当て、信者の有志は湯茶等の接待に當った。

鉄造の涌谷教会に在ること約十年、その間に入信した人びとの中には村岡章、小平国雄、小形京三、佐々木誠一郎、ならびに同夫人等のように牧師、伝道師として直接宣教活

動にたずさわるに至った人たちもあった。

鉄造は明治三十九年六月宮城県から転って山形県酒田市で開拓伝道に取りかかることになった。その前は明治三十一年から数年の間相ついで二人の牧師が酒田の伝道に当られたが、その後はしばらく伝道はとだえていた。

日本海沿岸一帯は元来仏教の盛んな所で、酒田には大小の神社約四十の他に、真言宗一、浄土宗四、曹洞宗八、浮土真宗十五、日蓮宗五、合計三十一の寺院といくつかのわき寺もある。酒田は鉄造の郷里、しかも二十一年間離れていた後のことでもあり、「予言者は郷里に尊ばれず」どころか一凡夫をもって自ら任ずる鉄造の伝道開始には一方ならぬ困難が伴っていた。最初はわずかに二人の青年未信者を相手に福音を説き始め、伝道集会所は貸家を相ついで追払われながら開拓伝道の歩を進めて行つた。それを見て当地の仏教界は黙ってはおらず、破邪顕正耶穌教退治といった演説会をたびたび催した。一般からもキリスト教が邪教として流し目で見られるのも当然であった。

鉄造は酒田市の伝道着手後まもなく、当時無牧のままであった鶴岡の教会をも兼牧する

こととなった。二十八キロの道を自転車または徒歩で、鶴岡に主任牧師の着任まで四年間通い続けた。その一方酒田市近隣町村にも福音を伝えることを大事な目標として力を注いだ。遊佐、松嶺、本楯、観音寺、余目、新堀等の町村がそれである。更に月二度の出張地としては隣接秋田県由利郡まで足を伸して行った。かくして酒田教会は逐次信徒の数を増し、市周辺の町村からの農民クリスチャンをも含む教会として成長を続けた。すなわち鉄道の願いもまたそこにあった。やがて邪教呼ばわりも声をひそめるようになり、むしろ教会の存在とその働きはこの地方の各般に亘って益々理解と関心をもって迎えられるようになった。

鉄造は伝道者としての根本的使命を堅持しながら、まず努めて民情を知るとともに、社会的地位権力の別なく、等しく敬愛尊重の念をもって人々の知遇交友の範囲を拡めて行った。酒田および鶴岡を中心とした地方各界の有力な代表者を初め周辺町村の農民に至るまで、除々にキリスト教に対する理解も深まっていた。教会に足を運ぶ者の数も次第に増してきた。明治四十年一月酒田の近村高砂の

青年会発会式講演の依頼を受けて後は近隣各町村の青年会、婦人会、同窓会の講演の要請に接する機会が多くなり、さらに酒田郵便局の定期精神講話を仙台通信局長より、酒田市民働養実行委員、教化運動委員を酒田市長より囑託され、公私経済緊縮共励委員を山形県より囑託、酒田市教育会評議員、山形地方裁判所管内小作調停委員（山形地方裁判所より）、酒田市方面委員（山形県より）に選任され、相次いで公共任務を担いながらも、飽くまで牧師たる使命を果しての上であることはよく認められていた。またこの地方の大かたの人びとはキリスト教精神を根底とした者の協力は社会各般に有用かつ必要とさえ認めるような風潮にまで傾いていたことは否定できない。

明治四十三年酒田郵便局の精神講話囑託を仙台通信局長から受けて以来、昭和七年病床に伏するまで局内の定期講話を続け、当時通信省発行の機関誌「通友」にも寄稿を求められていた。局員の中にはキリスト教に関心を深め、進んで教会の礼拝に出席し、入信する者も除々に現われ、中には志を懷いて神学校に進み、牧師となった人、又婦人伝道師とな

った人もある。なお酒田郵便局の一つの特徴としては毎年一度は局長初め非番の有志は信者未信者ともに教会堂に集り、局員だけの純然たるキリスト教の礼拝を守ることであった。鉄造の存命中は続けられ、病床に伏して後も一度は勇を鼓して列席した。

鉄造は教会の諸集会のほかに、信仰上、思想上の疑義やあらゆる種類の煩悶懊悩に苦しむ人びとの来訪を受けることも頗る多くなるに連れて、人事相談もまた伝道上の重要な任務の一部として力を入れるようになった。家庭紛争から猫いらずを懷にした婦人、当時のいわゆる監獄部屋を脱出して、救いを求める青年、寺院生活の空寂を訴える若年の僧、自殺を覚悟の刃物を手にして夜半門を叩く中年男性等々、警察の人事相談へも持込めないさまざまな問題が相次いでもたらされた。しかし、酒田に一人、鶴岡に二人の信者求道者の弁護士がおって、卒先して協力を傾けられたことは望外の幸であった。

さらに鉄造が伝道の手をさしのべずにおれなかった対象に盲人たちの群があった。鶴岡に住む一人の盲人信徒の協力を手がかりに酒田周辺の盲人たちにも働きかけ、点字聖書を

求めては回覧に供し、当面必要の個所を写本して、集案内の点字はがきと一緒に発送していた。かつて最上川の激流に身を投じようと再参岸頭に付んだ後、教会に足を運ぶようになり、盲人は盲人として特に天父の深い恩寵のもとにあるという強い確信と希望に燃え立ち、やがて万難を排して上京、小石川の盲入学校に学び、さらに残って同校で教鞭をとるに至った小野寺という有為の教育者も現われた。

鉄造が肝臓癌を患い床に伏して約半年、同志社神学校時代の級友のひとり、剣持省吾牧師が「基督教世界」(昭和八年五月四日発行)に寄せた「地上の友を語る」という文の中で次のように述べておられる。

※

「先年基督教世界社より天上の友について書け、との命を受けたまま打過ぎていた。今となっては天上の友を語るよりも、むしろ地上の友を語ってその責を塞ぎたいと思う。」

願れば私の同志社神学校卒業はもはや三十九年の昔で私の伝道生活も四十年に近い。七人の同期卒業生中今なお伝道に従事するものハワイの奥村牧師、奥羽に三浦牧師の二人あ

るのみ。奥村牧師はあまりにも有名なものの、私は常に師を級友にもつことを名譽としている。私はこのごろ三浦牧師の徳風を慕うの情に耐えず。私は師を友として語ることについて自らを励まし慰めんとするものである。

三浦牧師はまことに隠れたる伝道者、毫末も自己を世に顯さんとする意なきも、今は「町の父」「町の天使」と呼ばれて、地方数里に亘る幾万の民衆の尊信を受けておられる。師は実に酒田基督教教会牧師として二十有余年の長き聖職を続けられていると師自らも言う。

二十七年間身を粉にして働いた、と実にその通りである。隠忍持久遂にその終りを全うしたる人。さすがは東北人の粘り強い根氣は敬服に値いする。私は級友中に三浦牧師を有することを誇りすると共に、自ら顧みて懺悔愧死せんのみ。

牧師と私は学校卒業後東西に相離れ、不思議に再会の機なく相見ざること三十九年、然るに老友追慕の情切にして書信の往復しきり、まず師自らの書信に言う。

「学校卒業後、会津喜多方に二年、ハワイに

一年、陸前涌谷に十年間伝道、明治三十九年、二人の求道者を相手に酒田伝道を始めてよりすでに二十七年、五年前やっと自給独立、会堂は十年前に二万三千円で建立、副牧師も居られるようになりました。青年団、婦人会、戸主会、軍人分会等附近四郡の各町村殆どに活動をし、その聴衆累計は十万一千余となります、教会は初めから農村市街協同のものです。」

これこそ隠れたる、しかも偉大なる伝道者の成功記録、天上の友の美しき追憶にあらずして、地上の友の現実の成功を紹介するの決して不遜に涉らざるを思う。

牧師は昨年十一月初旬、肝臓癌にかかり、今は全く病床の身。只管療養に努められている。師は「静かに残務を整理しつつ主の御召をお待ちしています。」と記された。何という平和。老牧師の聖姿を偲ぶ。父なる神。栄光、友の老顔を照して、天にまで祈る。

牧師は昨年十一月二日朝、病を押して講壇に立たれた。列席の兄弟姉妹一同はいたく心を打たれた。爾来病状いよいよ篤く、再び講壇に立つを得ざるかとの暗愁にまで追いやられた。然るに師を敬慕する余り今一度師の説

教を聴きたしとの熱烈なる願いに動かされて、二十七日聖日の朝再び無理を押して講壇に立たれた。その説教題は「主に捧ぐる身」。思うに師は自ら主に召抱えられてより四十年間の奉仕の生涯を回顧し、主に捧ぐる身の忠誠と純情に動かされたことであろう。この日の会衆百余名、受洗者二十七名。共に聖餐を守る。パンを裂き葡萄酒を傾つたその手、その指、彼らの目は開られ、彼らの心燃え立つを覚えた。ああこの厳肅。(以下省略)——

吉田輝男氏は同志社卒業後暫くして新聞報道員として、鉄造の死後間もなく酒田へ赴任されたが、同志社校友同窓会報(昭和八年十月十五日発行)に「三浦鉄造先生の昇天を校友に告ぐ」と題して次のような文を寄せておられる。——

「働く者は冬は温く而かも夏さへ涼し」との掛軸を見て「誰の書ですか」と無遠慮な質問をしたのは、私がこの地に来た昨夏、郵便局長室での挨拶の際放った第一矢だった。「同志社出身の生き神様三浦先生の書です」との答えだった。それから私は会う人毎に三浦先生についてのニュースにセンスを働かせたものだ。そして「酒田にはもったいない人だ、学

識人格ともアレ程の人はないだろう。酒田の生んだ近代の英傑だ」とは一致した飾りのない月旦であった。東北地方には同志社出身者はほとんどいないが、この街の聖者として、又宗教界の第一人者としての先生の存することとは真に心強い限りであった。

先生は当地にあって二十七年間にわたり、新島先生の遺訓を実践に転された不屈不撓の精神に燃え、悪戦苦闘ついに五十有七の寺院を持つ仏教徒の渦の中から、百九名のクリスチャンを創り、一方大地主本間家を初め一介の労働者からも浄財を集められ、三万六千円を突破するに及び、現在の酒田日本基督教会の創設となり、これを切っ掛けに鋭意近郷一円へと教化網の拡大を計られたのである。

昨冬肝臓癌を宣告されてより死の最後まで伝道の大使命を全うされ、笑って昇天されたことは、口の悪いジャーナリスト仲間でも、日頃涵養された精神力の賜物として舌を巻いた程で、危篤の報に枕頭につけた信者の群に対し、一々その性格の長短を示され、処世上かくせよと、カユイ所に手の届くように最後の戒告あり、「泣くんじゃない、笑って別れよう」とそれぞれ枕辺で握手を交し、死

の寸前には米国のフィカスという八十才の老友へ決別の便りを書かせ、苦惱をおさえてサインを終り、帰する如き昇天をなされたが、これこそ聖雄の安心立命だったというべきであらう。時に九月二十二日午後二時四十五分、初秋にしては珍しく雲低くたれた日だった。」

#### ※

鉄造はその生前交友の数相当多く、都市農村を一九した伝道に共鳴関心を持ち教会を訪ねる内外の友人の数も割に多かった。中にはヘッケルマン氏のごとく再参来訪して協力し、フィカス氏のごとく、酒田教会には副牧師は絶対必要として一人を迎えたと共に、その経費一切をも負担し続けられた老友もあった。鉄造の終世の伝道活動の上で最も重要視した点は、けだし、社会のどんな地位階層の人でも、等しく天父の広大な慈愛のもとにある尊敬すべき友として進んで宣教の手をさしめることであつた。反対をし、あるいは反抗的態度に出るほどの人びとはかえって望みのある人として、愛情をもって導くことを怠らなかつたようである。

(筆者は鉄造氏の嗣子・松本市に在住)